

J. A. B. van Buitenen のインド文学哲学論集

原 實

1979年9月21日、僅か51歳でこの世を去った元シカゴ大学教授 Johannes Adrianus Bernardus van Buitenen は本邦に於いて就中 Mahābhārata の英訳三巻によって知られているが、彼の古代インドの文学、哲学にわたる27の論文は往時の僚友、現 Pennsylvania 大学教授 Ludo Rocher の手によって *Studies in Indian Literature and Philosophy, Collected Articles of J. A. B. van Buitenen* の題名の下に一書となって近時インドより刊行された。ここに、IJJ, JAOS, ALB.等の国際的学術雑誌、並びに著名な学者の記念論集 (L. Renou, M. B. Emeneau, J.Gonda, G. V. Bobarinskoy) に散在する碩学の論文が一書にまとめられて出版された事は、今後斯学の研究者に多大な便宜を供するものと言うべく、その労を執った Ludo Rocher に謝意を感じずる者はひとり筆者のみにとどまらぬであろう。

本書は彼の遺影に始まり、目次、出版元である American Institute of Indian Studies の会長 Joseph W. Elder の緒言、次いで恩師 J. Gonda と畏友 D. H. H. Ingalls による二つの追悼文、編者 L. Rocher の序文 (i-xxiv) に続いて本論入り、全27の論文が掲載される。各論文は注を最後に一括して集めているから、元来脚注であったものはその様相を一変しているが、他面この処置は著者が問題の核心に直参し、徒に長大な注をつけて博引傍証を誇示する学者でなかった事を示している。巻末は簡便な索引 (pp. 333-339) によって締め括られる。

全27の論文の配列順序は分野別よりも発表の年代順によっているが、編者の言うとおり、読者はこれによって著者 van Buitenen の生涯に於ける学問的関心の歴史的推移を窺い知る事が出来る。27の論文の対象はインド哲学、ヒンドウ教、説話文学、叙事詩、抒情詩、戯曲と諸分野に亘り、よって彼の学問の広がりを思わしめるが、方法論的にみても純粋に文学的

なものから、比較文学、比較思想論にまたがっている。彼ほどに梵文原典を幅広く読破した者は稀なりとは Ingalls の評言であるが、その学問領域と視野の広大は読む者をして今更ながら著者の学殖に敬意を喚起せずにおかぬものがある。

今、その総てを概観する事は筆者の能力もさることながら、また紙数の許さぬところでもあるので、以下にその中から晩年の幾つかを選んで紹介し、最後に著者 van Buitenen の生涯と学問に就いて一言したいと考える。

11. The Indian Hero as Vidyādhara (1958) : 刻苦勉勵の末に『明呪』を得、超人となった人間、Vidyādhara は Bṛhatkathā 系のインドの説話文学に親しいが、それはアラビア文学に移植されると性格の変容を余儀なくされた。文化の伝搬とその異文化に於ける変容の問題を、Vidyādhara に視点を据え、ヒンドウ教とイスラム教を対象として扱ったものとして極めて示唆するところ大なるものがある。東アジアに於いて『持明族』がどの様に変容したか、その研究にも示唆する所無しとしないであろう。

14. Gajāsurasamhāramūrti in Meghadūta 36 (1960-61): Ujjayinī の Mahākāla 寺院にことよせて歌われるこの句は Kūrmapurāṇa 1.36.26-8 その他に見える Kṛttivāseśvara としての Śiva 伝説を背景としているが、Vallabhadeva の解釈を排して、maṇḍala を『後光』『光背』の義にとって新解釈を試みる。

15. The Relative Dates of Śaṅkara and Bhāskara (1961): Śaṅkara ad Brahmasūtra 3.1.8 が斥ける召使 (sevaka) の比喻 (dṛṣṭānta) は、もと彼の峻烈な論難者であった Bhāskara が、今は伝わらない彼の Chāndogya Upaniṣad 注の中に述べていたものを Śaṅkara が意識的に反論対象としていたものと著者は推測する。そして Bhāskara は今一度彼の Brahmasūtra 注において Śaṅkara を論難する。両者の間に論難、応酬があったことがこれによって知られ、著者は両人が同時代に先後輩として生存していたと考えている (Cf. K. Rüping, Studien zur Frühgeschichte der Vedānta-Philosophie I (Stuttgart 1977). pp. 14 ff.).

16. The Name "Pañcarātra" (1964): MBh. 12. 337. 1, 12. 339. 11, 12. 349. 1, 62-68 等に Sāmkhya, Yoga, Pāśupata 等と並び称せられ、Śvetadvīpa の住人との連関や Vyūha 説を特徴とするヴィシュヌ教の一派、Pañcarātra の名称は何処に由来するか、以前から専門家の間に疑問とされていた。MBh. 12. 325. 4, 12. 328. 51 に一応の説明があるとしても、それが元来のものであったとは思われない。というのも『5』という数も『夜』という概念もこの派の教義と特に関係がない故である。著者は Bud-

dhasvāmin の Bṛhatkathāślokaśaṅgraha 21. 59 に見える parivrāṭ pāñcarātrikaḥ (五夜の遊行者) を, ekarātraṃ vased grāme nagare rātriṣaṅgacama の遊行者の生活規則と結び付け, 元来異端の遊行者を意味していたものが特殊化されていったものと推論している。

17. The Elephant Scene of Mṛcchakaṭika, Act Two(1963): Text の伝承形態に問題の多い該当箇所を仏典に見える『醉象調伏』物語を視点に入れて従来の読みを排して元来の読みを再構成したものである。Text は部分的に, 物語の背景を理解せぬ写字生により伝承される間に, 或る時期から別様に解釈されて現在に伝えられる事がある。この戯曲のこの部分もその種の運命を辿っていた。往時の常識を再現して, 読みを正すのは文献学者の任務であるが, この論文はその線上に位している。

19. On the Archaism of the Bhāgavatapurāṇa (1966): シカゴ大学の社会人類学者 Milton Singer の『Kṛṣṇa 総合研究』の企画に参加し, 彼はここで文献学と社会人類学の接点を模索している。Bhāgavata 派の聖典と仰がれ, 10-11世紀成立とされるこのプラーナがヴェーダ語の装いを有する事は周知の事実であるが, そのよって来る所を検討する。Bhakti 運動の所産として, もと正統派の圏外に成立したこの宗派は Nāthamuni, Yāmuna, Rāmānuja の鋭意努力する所, 汎インド的承認を得るに到るが, 本典の擬古文化はその正統化, 権威づけの努力の一環である事を Āgama-prāmaṇya その他によって立証しようと試みる。同じ意図を著者は Madhva の Ṛgbhāṣya 作成の中にも見ようとしている。

20. A Contribution to the Critical edition of the Bhagavadgītā(1966): 六部より成るこの論文は先ず MBh. 6. 47. 6 と Bhāskara の Gītā 注 (Bhagavadanuśayānusaraṇa) によって BhG. 1. 10 の読みを訂正し, 更に BhG. 第 1 章の全体を検討する。既に 8 世紀, Śāṅkara の手にした Text は Bhāskara のそれと読みを異にしていた事が明らかとなる。そして Kashmir 伝本が MBh. 全体に重要であっても, BhG の Text 再建には必ずしも役に立たぬ事を立証して旧来の O. Schrader の所論を批判し, 所謂 Poona 批判版の校訂者の無批判的態度を批議している。更に第 2 章—8 章にわたり, Bhāskara の用いた BhG. の Text と所謂 Vulgate との異同を明示し, BhG. が比較的初期に権威ある Text として固定した事を結論している。Bhāskara の研究の一環として既述の 15 と並び称せられるべきものであるが, 同時にそれは BhG. の原典の批判的研究に示唆する所極めて大なるものがある。

23. Some Notes on the Uttara-yāyāta (1968): Mahābhārata 1. 81-88 は有名な Yayāti 王の物語 (Yayāti-upākhyāna) の直後に位する故に, 通

常 Yayāti の後日譚と称せられるが、その唐突性、難解性の故にこれまで後世の追補と見なされていた。しかしそれは人間の死後の運命に関する Yayāti と Aṣṭaka の対話を盛り、もと独立に伝承されていたものに相違ない。Chāndogya Upaniṣad 5. 3, Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad 6.2 に見える所謂『五火二道説』とこの Uttara-yāyāta との比較研究は、叙事詩のこの部分が王族に固有な来世に関する知見の伝承 (baronial lore) の線上に位する事を明示した。彼は MBh 1. 81-88 を概観した後、1.85. 10-20 を懇切に分析注解して、Uttara-yāyāta を Baronial Upaniṣad と性格づけている。

24. Two Notes on the Meghadūta (1968) : 上記の14と並んで、Kālidāsa の抒情詩解釈への試みである。第一は Meghadūta 冒頭(4)の pratyāsanne nabhasi の nabhas をインド土着の注釈家や、それに倣う近年の学者の『雨季の最初の月 (śrāvāṇa)』の義を排して、『天』の義に解釈する。その解釈が詩人の意図した所に迫る所以を説いて、その可能性と妥当性を述べる。第二は35の khacita-valibhiḥ cāmaraiḥ の vali を美女の瑞相 trivali (膺上の三本の皺) の義に取り、『the chowries by whom the navel folds of the women are encrusted』と訳している。

25. The Seven Castes of Megasthenes (1969) : 紀元前4世紀、ギリシャ人の大使としてマウリヤ王朝の宮廷に在り、その断片が今に伝わるメガステネスの報告はインドに7階級ありと伝えている。通常4とされる Caste が何故にここで7となっているか、メガステネス研究の当初から学者の問題とした所であった。その7とは『哲人』『農夫』『牧人』『商人』『兵隊』『検察官』『公務員』とされるが、この分類は免税の特権を有する哲人を除いて、『納税者』と『税の受給者』を基準としているという。即ち、農夫、牧人、商人の3は前者に属し、兵隊、検察官、公務員は後者、即ち税金によって雇用されている側にある。宮廷の官吏は『租税』の立場から人民7分類をこの異邦人に伝えたものと想像される。尚、メガステネスの Caste 相当語の原語は meros, genea であったと思われ、梵語相当語は jāti であったと推定される。

26. On the Structure of the Sabhāparvan of the Mahābhārata (1972) : 有名な従兄弟の賭博集会の場面を描く大叙事詩の第二巻がもと王の灌頂祭 (Rājasūya) の重要な二要素、灌頂 (abhiṣeka) と賭博 (akṣavāpa) を中心に anumati, digvyāsthāpana 等を順次配して構成されていたものであることを立証する。徳の誉れ高い名君 Yudhiṣṭhira が何故に Duryodhana や Śakuni の誘いに乗って賭博集会の場に出掛け、惨めな敗北を喫して王国を失い13年間の国外追放の憂き目に会わねばならなかったか、以

前から叙事詩研究家の疑問とした所であった。著者は、古代の祭式次第と叙事詩の物語展開の類似を看破して、叙事詩作家の構図の下に Rājasūya 祭の下敷きのあったことを洞察した。

この他、Rāmānuja Śrībhāṣya 1.1.1 の解釈に関するもの二篇 (1と3)、有名な Chāndogya Upaniṣad に見える *vācārambhaṇam* の解釈に就いて二篇 (2と10)、それに連関して Upaniṣad の *satyam* の概念の五段階発達形態探索への試み (21)、*ānanda* の概念を巡り Taittirīya, Maitrāyaṇīya 両 Upaniṣad に関するもの一篇 (27)、*Studies in Sāṃkhya* と題するもの三篇 (6-8) (MBh.12.187の原典解明, *ahaṃkāra, sattva*), AV. 10. 8. 43b の *guṇa* の解釈に短編一つ(4)、mahān ātman の mahat の微妙な語義変遷を辿るもの一篇 (18)、*akṣara* の概念によせて長文の二篇 (5と13)、より一般的に古代インド倫理 (世俗) と宗教 (出世間) の根本概念 *dharma* と *mokṣa* を扱い、それらが哲学的に如何にして解決さるべきかを論ずるもの一篇 (9)、更に *The Śubhāśraya Prakaraṇa (Viṣṇu Purāṇa 6. 7) and the Meaning of bhāvanā*(3), *kapyāsaṃ puṇḍarikaṃ*(12), *The Sāmaveda in the Pravargya Ritual*(22)がある。

以上、27編の論稿⁽¹⁾はいずれも独創的にして問題の核心をつくもので、その全てに賛同しないにせよ、読者は著者の鋭く且つ独特の解釈の視点をみる。ただ、筆者が何よりも惜しみ且つ残念に思う事は彼が Śāṅkara, Rāmānuja を踏まえた類稀な Vedānta 研究者でありながら Bhāskara 研究を大成しなかったことである。ここに収められた幾つかの論考の中でも、彼が Bhāskara 研究に熱意を燃やしていた事は明らかであり、なかならず Śāṅkara との関連に於いて彼によって解明さるべき問題が数多く残っていたと思われる。更に今一つ、彼の MBh 翻訳が延びて第12巻に到らなかった事は Ingalls と共に悔やまれる。この叙事詩の複雑にして難解な部分は、Sāṃkhya を初めとしてインド哲学一般に造詣の深かった彼の明快な翻訳を待っていた筈であった。

かって学窓をともにした者として最後に筆者は著者 J. A. B. van Buitenen への追悼の意をこめて、その生涯と学問の一端を邦語で綴ることをその鎮魂的義務と考える。

彼は1928年5月21日ハーグの宝石商の家に生まれた。若くして東洋学に関心を有していた彼はハーグの高等学校の最終年に西洋古典学の師であった Ali Beth 博士に Sanskrit の手ほどきを受けた。1946年 Utrecht 大学に入学、往時の碩学 J. Gonda に師事してインド古典学を修め、傍らアラビヤ語、ペルシャ語、ジャワ語を習得した。学生時代、既に Kathāsarit-

sāgara に取められる Vetālapañcaviṁśatikā をオランダ語に翻訳、1952年にそれは Leiden (E. J. Brill) より出版された (Sprookjes van een spock)。しかし、彼はその Ph. D. 論文に Rāmānuja の Gītābhāṣya を選んだ。ここに Vedānta 哲学は Viṣṇu 教神学と結びついているが、有神論的の神学の解釈学的研究は終始彼の興味をひく所であった。1953年10月、Ph. D. の学位を得るやインドに旅立ち、Deccan College の Encyclopedic Dictionary of Sanskrit の企画に参加して1956年に及んでいる。この間、彼は南インドに旅行し彼地に残れる Veda 祭式の実態を写真とテープに取めた。Poona で催された Vājapeya 祭の実演も彼のフィルムに取め、テープに記録した所となったが、彼こそは第二次大戦後、この種の技術を身につけた最初のインド古典学者であったと思われる。この間にも彼は Rāmānuja 研究を続行し、1956年 Vedārthasaṅgraha の批判的出版と訳注を公にしている。1957-8年、彼は Rockefeller Fellowship を得てアメリカ合衆国に渡り、彼地の Indian Studies Program に参加して各地の大学を訪れた。筆者が彼の知己を得たのもこの時期で、Harvard の D. H. H. Ingalls 門下に於いてであったが、彼は Ingalls と共に Bhāskara 共同研究を意図していた。往時 Ingalls が Gītābhāṣya を、そして彼は Brahmasūtrabhāṣya を校訂し英訳する予定であったが、後年 Ingalls は Bhāskara 研究の全てを彼に託した。それが故あって1966年中断された事は返す返すも残念である。その後彼は Copenhagen の Critical Pali Dictionary の企画に参加し、1959-61には Utrecht 大学の Reader に任命されたが、1961年シカゴ大学より誘いを受けるや再度アメリカに渡り、二年後にはそこの正教授となって、死に至るまでその職にあった。京都大学の井狩弥介、宮崎大学の田村智淳が師事したのはここシカゴにおいてである。1962年、彼はその成立に多くの問題を擁する新散文ウパニシャッド Maitrayāṇīya Upaniṣad の研究を The Hague より公刊し、続いて1968年 Poona より Pravargya 祭の研究、1971年 Madras より Rāmānuja の師、Yāmuna の Āgamaprāmāṇyam の校訂英訳を出版した。

哲学を離れて、文学にあってもこの間に二冊の名著がシカゴから出版されている。その中、Tales of Ancient India (1959) は彼の若き日の関心の的であった Vetālapañcaviṁśatikā を始め、Bṛhatkathāślokaśaṅgraha, Pali Jātaka の英訳を載せ、Two Plays of Ancient India (1964) は Mṛcchakaṭīka と Mudrārākṣasa の優れた英訳である。そして1967年、彼は一念発起して大叙事詩 Mahābhārata の全訳を志した。1973、1975、1978年にシカゴ大学出版会は三冊の大冊を世に贈り、英訳は大叙事詩の第五巻まで刊行されたが、彼の急逝はその訳業の出版を中断させることとな

った。その原稿は既に全訳業の半分を済ませていると聞く。現在 Baroda Critical Edition に基づいて Rāmāyaṇa の英訳が California 大学の R. Goldman その他によって進められ、Princeton 大学より出版されつつあるが、これとても彼の Mahābhārata の訳業に刺激されたと言っても過言でない。優れた一個人の学問の影響波及する所大なるを我々はここに見る。

- (1) 通読中にたまたま気をついた誤植のみ以下に列挙する。p. 258. 26 (Citā → Gitā), p. 286. 18 (tarta → tatra), p. 806-5 (lilely → likely), p. 307. 11 (Tnis → This), p. 311. 16 (delete to), 25 (he → the), p. 317. 20 (after, all, → after all).

Studies in Indian Literature and Philosophy, Collected Articles of J. A. B. van Buitenen, edited by Ludo Rocher, pp. i-xxiv+1-339. American Institute of Indian Studies., Motilal Banarsidass, (Delhi, 1988).